

聞名仁教

第 180 号 毎月発行
(発行日) 2025 年 9 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutsuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)
毎月 18 日午後 6 時 30 分始

念仏の緒おを強くして

佐々木蓮磨

僧都は「念仏しながらも妄念が起ころのをどう始末すればよろしいか」と重ねてお尋ねになると法然

すべて信仰上で悩むことは、自分の胸三寸即ち心が思い通りにならぬことでありましょう。ありがたいお説教を聞いているときは、涙がこぼれるように喜べるが、お説教が終わって帰える下向のそのときは、ありがたい気持ちには消えて、浅ましい心がムラムラと起こってくるのです。また仏前に端座して合掌した途端は殊勝な気持ちになるが、やがて手と心が別になつて、手は仏様に向いているが、心は台所の方に走ったり、子供のところへ飛んで行ったりして始末のつかぬものであります。

かつてある坊守研修会に行つてお話をし、あとに座談会に移りましたところ、聴講された坊守さん達が異口同音に「こうして家庭からはなれてお寺に宿泊し、尊いお話をきかせていただ

いていると、まことにありがたく念仏を喜ばせて頂くことが出来ますが、また家庭に帰ると、もとの木阿弥になります云々」と云われたことがあります。こうした嘆きは、いまの坊守さんに限ったことではありません。すべての聞法者が経験する嘆きではありますまいか。

これについて思い出すことは鎮西の本覚坊が明遍みへん僧都に向つて問われるには「心が乱れたときに称える念仏は真の念仏とは言えぬ、心をしずめて一心に仏を念じて称える念仏が真の念仏である」と聞きますが、そういう尊い念仏を行ずるには、どういう心がけをすればよいでしょうか・・・と。すると僧都が答えて言われるには「そういう尊い念仏は上根の人のみができることで、下根の私どもとしては、心の統一ということは

到底できるものではありません。そこで私は念珠の緒を強くして、心の乱と、不亂にかかわらず、ひたすらに念珠をくつて称名するのみであります。心の乱と不亂にかかわりのない念仏こそ本願相応の念仏と承つております」と答えられたそうであります。

明遍僧都は、かつて善光寺参詣の帰りに法然聖人に対面し「いかがして、こんど生死をはなれることができますでしょうか」と尋ねられたところ、法然聖人は「ただ念仏してこそ」とお答えになりました。すると明遍

聖人は「いかに妄念が起ころうとも仏の本願力によつて往生はするなり」とお答えになりました。この一言で明遍は疑念が晴れて退出されたところ、法然聖人は、あとで独りつぶやいて言われるに「妄念を起さずして往生せんと思わん人は、生まれつきの目鼻をとりすてて念仏申さんと思うがごとし」と。

なんとというハッキリとしたお示しでありましょうか。(了)

《秋季彼岸会》

九月二十二日 (月)

午後二時始まり

法話

念佛寺住職

清沢満之先生に学ぶ

⑥

『絶対他力の大道』より、
清沢満之先生の文を引用いたします。

我等は死せざるべからず、
我等は死するも、なお我等
は滅せず。生のみが我等に
あらず、死も亦我等なり。
我等は生死を並有するもの
なり。我等は生死に左右せ
らるべきものにあらざるな
り。我等は生死以外に靈存
するものなり。然れども、
生死は我等の自由に指定し
得るものにあらざるなり。
生死は全く不可思議なる他
力の妙用によるものなり。
然れば、我等は生死に対し
て悲喜すべからず。生死な
お然り、況んや其の他の転
変に於いてをや。我等は寧
ろ宇宙万化の内に於て彼の
無限他力の妙用を嘆賞せん
のみ

* * *

さて、

「我等は死せざるべからず、

我等は死するも、なお我等
は滅せず。生のみが我等に
あらず、死も亦我等なり。
我等は生死を並有するもの
なり」

ですが、「我等は死せざるべ
からず」で、私たちはかな
らず死ぬ存在である、とい
われ、しかるに「我等は死
するも、なお我等は滅せず」
といわれるのです。この場
合の「我等は滅せず」とい
う「我等」は、「我等の身体
は」というのではなくて「我
等のいのちそのものは」と
いう意味でありましょう。
そういう「いのちそのもの」
は「滅せず」で、無くなら
ないといわれ、そして「生
のみが我等にあらず、死も
亦我等なり」といわれるの
です。

我等の身をして身たらし
めているいのちそのものは、
はかりなきいのちであって
滅しないのです。この事で
いつも譬えを出すのですが、
先達が「花びらは散っても

花のいのちは散
らない」といわ
れるように、桜
の花びらはある

とき咲いてしばらくすると
散る。しかしながら桜の花
を咲かせている花のいのち
そのものは散らず、毎年花
を咲かせている。あるいは
大海の波はそのつど起こつ
て消えますが、大海の海水
そのものは無くなりません。
このように、花びらや波は
私たちの身体に、花のいの
ちや大海ははかりなきいの
ちに譬えられます。我等の
身は滅しますが、我等の身
となつてはたらいっている
いのちそのものは滅しない。
それゆえこういういのちは
「生死を並有するものなり」
といわれるのです。

鎌倉時代の禅の高僧・道
元禪師（一二〇〇〜一二五
三）の言葉に

「生死は、すなわち仏の御
いのちなり」（正法眼藏・生死
の巻）

という有名な言葉がありま
す。この意味ですが、「仏の
御いのち」とは、仏の本質
である寿命無量のはたらき

であります。人として生ま
れるいのちも死するいのち
も、どちらも「仏の御いの
ち」の活動の現れでありま
しょう。仏の御いのちは、
真宗でいえばアミダ仏です。

『正信偈』では最初の一句
に「帰命無量寿如来」とい
われる、その「無量寿如来」
です。「生死は、すなわち仏
の御いのちなり」とは私た
ちが生死、すなわち生まれ
て死ぬのは、はかりなき
いのちのはたらき、いと
なみの外にはないということ
です。人として生まれるのも
はかりないいのちに於いて
生まれるのであり、死ぬの
もはかりないいのちに於い
て死ぬのです。人の身（心）
は死して形が無くなつても、
その全体が「仏の御いのち」
のいとなみなのだ、といわ
れるのです。

ただ人間には心があり、
心の中に、与えられたいの
ちに対する根深い執着があ
ります。それゆえ「生を愛
し、死を憎む」のです。生
を喜び、死を悲しむのです。
こうして一生死に脅かされ

てしまいます。ここに根本
的な不安があり、不安な人
生があるのです。それを
「苦」といいます。苦はイ
ンドの言葉では「ドユッカ」
(dukkha) といいます。こ
れは押さえつけられている
苦しみという意味で、いわ
ばストレスです。死は最大
のストレスです。

人間はたんなる石や草で
はなくて、心があります。
アミダ仏のいのちのほかに
私のいのちはないのですが、
我執我愛の思いが起こつて、
与えられたいのちの私を「我
が物」として深く執着して
しまします。そこから私の
身をおびやかすものに対し
て不安な思い、いわば「お
もいわずらい」（煩惱）がし
きりに起こるのです。私の
いのちが大きなアミダ仏の
いのちの一部、いわばアミ
ダ仏と一体のいのちである
ことだけなら問題はありま
せんが、人間には心があり
こうした煩惱が盛んですか
ら、不安が起こつて止まな
いのです。

もともとアミダ仏と一体
のいのちであることをはつ

きりと認識しているのなら、いいのですが、そうではなくてアミダ仏と私自身を意識的・無意識的に切り離し、「不安な思い」を起してその思いに振りまわされてしまふのです。そこでこれを何とかしなければ苦しくてやつていけぬということ、これが人生の大きな問題になるのです。

しかしどこまで迷いが深くて、私のいのちはアミダ仏のいのちを一瞬も離れないのです。生きようが死のうがアミダ仏の御いのちの中なのです。このことを清沢先生は「我等は死せざるべからず、我等は死するも、なお我等は滅せず。生のみが我等にあらず、死も亦我等なり。我等は生死を並有するものなり」と仰せられるのです。

いますが、生滅させているいのち（エネルギー）は生滅しません。物が生滅するのは、生滅せしめるエネルギーというか、はたらきがあるからです。波が現れて消えるのは、元に大きな海水があるからです。雲が起こつて、また消えるのは大きな大気（大空）が元にあるからです。

ですから生だけが我等ではなく、また死だけが我等ではなく、生死をして生死たらしめている大いなるはたらきが、我等のいのちそのものです。このいのちは生死を並有しています。これがアミダ仏です。

次に「我等は生死に左右せらるべきものにあらざるなり。我等は生死以外に霊存するものなり」といわれる「我等は」という意味は「我等の本当の自己は」と言葉添えると意味がよく分かります。我等の本当の自己は「生死」「老病死」によつて左右されない。本当の自己ははかりないのちの他にはないのちだから、

生まれて死んでなくなることもありません。我等の本当のいのちは生死を超えたいのちであるという意味で「生死以外に霊存するもの」であつて、「生死に左右されない」のです。

「生まれて死ぬる事」は人間が決めたことではなくて、有限な私たちにとつて、

「生まれて死ぬ」ことは絶対的に決定されていることです。自我（私）の能力でこれを自由にあつかうことはできません。時に自死をすることがあるのも、「生きている」という原事実が基礎にあるからです。そして

「生まれること」や「生まれたものは死ぬこと」にたいして、私たちの自由は全くありません。それははかりなきいのちのはたらきによつて、絶対的に決定されていることなのです。このことを次に「然れども、生死は我等の自由に指定し得るものにあらざるなり」といわれるのです。生まれることも、生まれた者が死ぬことも、これは人の意思で

どうにかなることではなく、全く私たちの自我の計らいが全く及ばない、絶対的に決定されていることです。

ではこうした生死がまつたく自我の自由にならないことは、何の力によつて決定されたのかというと「生死は全く不可思議なる他力の妙用によるものなり」といわれるのです。全く不可

思議なる他力の妙用といわれるのは、アミダ仏の寿命無量のはたらきといえましよう。私がその中で人に生まれ、生きて活動し、創作し、いろんなことを成していく、そして時が来てこの世を終える、その全体がアミダ仏のいのちの中であり、アミダ仏に於いてであり、アミダ仏とともにあり、アミダ仏のお徳を表わすべく生きているのです。どのようなことがふりかかろうともアミダ仏は私を離さないし、いつでもそこを立場として立ち上がれる。そこからもはや滑り落ちることも浮き上がることもできない場所に置かれています。人間感情の悲喜苦楽がそこに

は及ばないのちの大地です。西田幾多郎博士の歌に「わが心 深き底あり 喜も憂の波も とどかじと思ふ」

とあります、その底がアミダ仏とともにいる場所です。そこで清沢先生は「然れば、我等は生死に対して悲喜すべからず」といわれるのです。

そして最後に「生死なお然り、況んや其の他の転変に於いてをや。我等は寧ろ宇宙万化の内に於て彼の無限他力の妙用を嘆賞せんのみ」と云われています。アミダ仏のはたらきは宇宙一切にはたらいてまします。まことに不可思議ないのちのはたらき、この不思議さを讃えずにはおれないと云うことでしょう。親鸞聖人も

「この如来、微塵世界にみちみちてまします、すなはち一切群生海の心にみちたまへるなり」（『唯信鈔文意』）と仰せられています。無量寿如来のましまさぬところはどこにもなく、一切にみちみちておられ、人の心に

もみちみちておられるとの仰せであります。ですから私たちの生も死も、アミダ仏のはたらきの中でありま

す。アミダ仏のいなさらぬところはないのであり、アミダ仏と離れて私は存在しないのであります。

しかるに根拠のない無明によって、私たちは個々別々の存在と思い、孤独となり、他と対立しやすくなり、人々とのいのちの平等に気づくことなく、めいめいもちの小さな宝（才能、資産、性格、知能、学歴など）に重きを置きすぎ、他者と比較して、優越感ともなり劣等感ともなつて人と人の間に差別をつくつているのであります。一切の人がともにこの絶対無限の妙用に於いて生きているという根本的ないのちの事実こそ、他の人々と平等にであえる場所であります。

最後になりますが、南無阿弥陀仏の念仏の声はこの絶対無限の妙用が、ご自身を私たちに気づかせるために、喚びかけてくださるお声であります。この念仏の

声に喚び覚まされて、「無限他力の妙用を嘆賞（讃嘆）」させていただくのです。

（了）

【住職雑感】

前立腺のガンの疑いがあるということ、以前に受けたMRIと生検を再度受けねばならなくなった。MRIを先

ず受けたら、白い部分があり、高率的にガンの疑い有りということで、更に精確な生検を受けることになった。生検という精密検査はレーザーで十力所ほどの細胞を取ってガン細胞があるかどうかを調べる。

以前も行ったことがあるが、今度のは感染リスクの少ない方法で実施することになり、これは非常に痛いので全身麻酔をして行うことになった。

八月のお盆が終わった頃に一泊二日の入院で検査を終了した。そして一週間後に検査結果を聞く。結果、ガン細胞は見当たらないということで、以前もそうだったが、どうやらガンではなさそうであった。もしくは見つからないほどガンが小さかったということである。ひとまずホッとしたことであつた。

生検の検査は結構大変なので、これを「絶対にせよ」と医師から言われたときは、いささかうんざりしたが仕方が無い。七月の初めから八月の終わりまでの二ヶ月間は平常の安らかな日常と云うよりは胸に少し雲がかかったような状態であつた。日常生活は全く変わらなかつたが、不安煩悩の雲が平生より濃い感じが続いた。こういう雲を正信偈では「雲霧」というが、その通りである。心に雲霧がなく日本晴れなら気分が非常によいのであるが、人生生活はいつも晴天とはいかない。どうしても煩悩の雲や霧が心にかかる。ただ日々は雲霧の濃い日と薄い日がある。平生は雲は薄く感じるが、今回は濃い日々がしばらく続いた。

ただ雲霧はどこまでも実体はない。不安はどれほど大きくとも実体はないのである。どんな不安もたんなる「思い」に過ぎないのである。そしていつでも変わらずにあるのはどっちにどころんでも「今ここに生きている」という事実であり、その事実が一瞬一瞬続いていることである。こ

の事実のはかりないのち（アミダ仏）によって常に与えられているのであり、そこには悲喜苦楽という思いは届かない、確かな実在である。いわば「アミダ仏がともに居てくださる」のである。アミダ仏のいのちに抱かれているのである。此処には苦はない。不安の苦は「頭の思い」だけにある。今生きているという身の事実には苦があるとすれば、「痛い」か「しんどい」という身体の感覚的な苦で、これは身体をもつて生きているかぎりまぬがれない。安田理深師が「病気の苦は、痛いかしんどいだけであつて、それ以上でもそれ以下でもない」といわれたがその通りである。あとの「ああなつたらどうしよう」「こうなつたらどうしよう」というような不安は実体のない「思い」だけなのである。しかし、そうはいっても煩惱熾盛の凡夫で不安はどうしても起こってくる。道理はわかっても不安煩悩はしばしば起こるのである。しかしこの煩悩は有難いことに「お念仏の縁」であつて、こうした不安な思いが起こると、そこ

に止まらず、お念仏をさせていただく。お念仏を称えらるお念仏はアミダ仏が「ここにいます」「お前の主（あるじ）であるぞ」「お前を抱いている」

「死ぬのではない浄土へ連れて行く」のお声である。このお声が有難い。お念仏によって、不安な人生に耐えて生き、また安らぎを与えてくださる。不安には実体がなく、真にあるのははかりないのちのはたらき（アミダ仏）ばかりであることをいよいよ知らされる。これが現在の依り処であり、最後の依り処でもある。

このたびのことで、ますますアミダ仏がより親しく感じられるように念仏聞法に励まねばならぬと痛感した次第である。

検査結果を聞くために診察室に入り、医師から面と向かつて「何といわれるか」という時の気持ちは正直いやなものである。何人かのお方から、ガンの手術後に再発していないかどうか、ガンマーカークの検査結果を聞く時はすこぶる不安だと聞いたことがあるが、その気持ち少し分かることであつた。